九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

1940年代前半に於ける福岡県教育会『福岡県教育』の内容について ： 会員の投稿論攷の検討

新谷, 恭明
九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座 ： 教授 ： 日本教育史・社会教育史

https://doi.org/10.15017/27422

出版情報：大学院教育学研究紀要. 15, pp.1-22, 2013-03-28. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2012，第15号（通巻第58集），1-22
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.15, 1-22

1940年代前半に於ける福岡県教育会『福岡県教育』の内容について

── 会員の投稿論攷の検討 ──

新　谷　恭　明

はじめに

地方教育会の機関誌が教育情報を流通させる回路として機能したであろうことは想像できる。すでに前稿[(1)]において『福岡県教育』では掲載記事に他誌からの転載が目立つこと，国民学校に関する記事がどのように『福岡県教育』を通じて会員に届いていたのかを模索してみた。

今回は福岡県内の会員の筆による論攷がどういう内容の教育情報であったのかを読み解いてみたい。まず，他誌からの転載記事や県外への依頼論攷，通信記事などは除き，所謂会員が寄稿した記事のみをチェックした。全部で407本。各年ごとの論攷数は左の通りである。

昭和15年	103本
昭和16年	112本
昭和17年	87本
昭和18年	78本
昭和19年（７月号迄）	27本

但し，見直すたびにチェックを免れていたものが出てくるので，厳密とは言えない。大まかな概数と考えてもらいたい。戦局がきびしくなるにしたがって本数が減ってくるのは全体の厚さの問題と関係があるのかもしれない。また，論攷の内容も多様であり，量的には数頁に亘るものからコラムレベルのものまでがあり，本格的な研究論文や論説に近いものから身辺雑記的なものまで質的にも非常にばらつきがある。

それらのものをまずは執筆者の側面から見てみる。常連に近い執筆者が相当数居り，彼らは『福岡県教育』の輿論を形成している主力と言うことができるだろうからだ。

次いで，論攷を主題別に見ていくことにする。主題は教科教育にかかわるもの，思想史や郷土史にかかわるもの，報告文の類い，学校経営・学級経営にかかわるもの，雑文などが考えられる。しかし，雑多なものが１冊に閉じ籠められている教育会誌であるから，下手に数値的処理をするより，主観的な印象が先走るものであっても，まずは福岡の教育関係者が『福岡県教育』を通して言おうとしていた事どもを論うことは意味のないことではないと考える。

Ⅰ　投稿の常連たち

執筆者は11校の国民学校と１団体を含む159名を確認している。そのうち60名が複数回の掲載を得ており，22名が４回以上文章を掲載していた。

表１はその４回以上の掲載を果たした人物の一覧表である。35回という圧倒的な回数の掲載をしている井上正記については前稿に於いて紹介した。繰り返しになるが，略歴は左のようになる[(2)]。

明治22年　福岡県生まれ
明治45年　福岡師範本科第一部卒
大正12年　福岡師範訓導
昭和２年　久留米市小学校校長
昭和14年　門司市視学
昭和21年　退職
昭和25年　筑吉高等学院創設院長
昭和32年　退職

そして，著作としては『生命の道徳教育』，『敬と愛の学校教育』（昭和８年　佐藤末吉と共著），『新しい教育読本―母のために』（昭和23年），『趣味の社会読本』，『私達の天皇』（昭和39年）などがあった[(3)]。

昭和16年９月号に「国民学校教育上の主要問題」と題する論文を掲載したのを皮切りに毎号欠かさずこの論文の続編を連載し続け，昭和19年７月の最後の号まで連載を続けたということは前回報告済みである。

次いで執筆回数の多いのは19回の三角嘉走である。井上正記が初めて稿を下ろしたのは国民学校が開始された後の昭和16年９月号であったが，三角は昭和15年にはすでに論考を投じている。昭和15年２月号には「国民学校案の要約及び批評」という論攷を掲載している。その概要は左記のようなものであった（概要は新谷の抽出）。

一　国民学校案の要約
二　国民学校の名称について
　小学校の名称を廃する必要はあろうか　小学校のみ国民学校でいいのか　初等高等国民学校という呼称如何
三　教科について
　統合　扱い、実際にはひとつの教科にはならない　教科目には大した変化はない
四　根本方針について
　皇国精神について今さら言うこともあるまい

五　内容刷新について
　難しいだろう
六　試補期間について
　試補制度と師範学校の教生演習の区別
七　俸給国庫支弁について
　なぜ建前に留まるのか

三角は勤務先を福岡市御供所校と記しており，御供所小学校（国民学校）の教員もしくは校長であったと考えられる（仔細は未調査）。右の論攷の趣旨には来るべき国民学校制度とそれに伴う読者の不安にたいして応えようという意思が見られる。殊に試補制度や俸給国庫支弁などの問題にも言及しているし，国民学校の名称を小学校段階のみに付することについて異論を唱えている。また，強化の再編自体はたいした意味を持たないだろうというような現場的な見方もしている。彼の執筆動機は「然るに発表されたる要綱の範囲内では，国民学校の細部に亘つては窺ひ知ることは出来ない。私がこゝに批評として揚げたことも，要綱の中に疑問とすべき点あるを見出して多少の意見を述べて見たに過ぎない」と書き，当時の教員の持つ不安を代弁している感がある。

国民学校に関して三角嘉走は昭和17年６月号に「少国民文化運動の起因とその性格」という論文を掲載し，国民学校精神に触れてはいるが，直接的に国民学校ということにこだわった意見は展開しない。彼の関心は訓育であり，徳育思想であり，修身科教育であった。昭和15年６月号に「今後の学級訓育」という論攷を載せ，日本精神に基づく学級経営を提唱しているが，その主張は左の通りである。見出しは論攷に従い，概要は本文より恣意的に抽出した。

「信順和合の学級建設」
　新考査法は幾多の革新と新しい弊害を生じた
　日本精神の特質　大和の精神　信順和合
　児童相互の競争は対立となり反目となる
　第二国民同士が和合すべし
「真東亜の指導者錬成」
　教師を補佐する級長、副級長の存在　これには疑問　ただ命令を聞くだけ　真東亜の指導者たるべき第二国民はそれではいかん　だから、級長制度を廃して輪番に日直または週番制とする
「全児童皆陛下の赤子」
　優良学級建設のために劣等生が虐げられてきた
　主知主義は過去の遺物
「真剣で頑張り屋の育成」
　労作教育には真剣さが必要

「日本我に生きる国民の錬成」
　個人主義の弊害と言うが，実例を聞いたことがない
　実例は点取り虫であり，立身出世主義である
　刻苦勉励の目標は皇運扶翼

右に抜き出したように日本精神と言うか皇運扶翼というものを中心に置いた徳育思想を展開した。右の論文はその考え方に基づく学級経営論であるが，修身科教育や学校行事に関しての論攷が多い。「小学修身書より国民科修身書へ」（昭和15年９月号）「国民科修身書の誕生まで」（昭和15年11月号）といった修身科の位置づけを示すものを国民学校開始前に発表し，昭和16年に入ると「四大式の儀式次第方法に関する研究」（昭和16年２月号），「行事教育の根柢」（昭和16年５月号），「文部省制定による皇室国家に対する礼法」（昭和16年６月号）と学校行事に対する喚起を促すものを論じ，さらに「「ヨイコドモ」に記されたる皇室国家に対する礼法」（昭和16年７月号），「「ヨイコドモ」の諸徳綜合的取扱ひ」（昭和17年５月号）と修身科教科書に関するコメントを書くようになる。また，「国民学校に於ける相撲解説（一）（二）」を昭和18年の７月号，８月号に分けて掲載している。これは相撲が対象であり，体錬科とかかわるが，「積極敢為の精神を涵養」「強化」「増強」（７月号）をはかるものとして位置づけており，修身科ないしは国民学校論からの延長で考えているものであろう。

一方で，「大東亜結束の紐帯と教育者の信念」（昭和17年３月号），「少国民文化運動の起因とその性格」（前掲），「神農精神の振起」（昭和17年11月号）という理論的な考察を展開している。こうした理論の前提には「豊後聖人三浦梅園先生」（昭和16年１月号）という梅園についての思想史的考察の論文があるが，これは梅園を「我が国体の優秀を賛美し尊皇愛国の精神を発揮し名教を維持した著大の功労のあつた」人物として評価している論攷である。また，これらの論攷の合間を縫って「万歳」（昭和17年７月），「皇道世界観の確立」（昭和17年９月号），「決戦下の教育魂」（昭和18年10月号）といった彼の思想を背景とした短いエッセイを発表している。しかし，昭和19年に入ってからの出稿はない。

柴田義雄は昭和17年に集中して論攷を掲載した人物である。彼は糸島郡小富士[(4)]小学校長であったが，昭和17年11月号の論攷では福岡県学校衛生会主事の肩書きとなっている。彼は昭和15年12月号に「手記三題」という小エッセイを書いている。内容は「国民学校講習会日記」，「高千穂に登る」，「新体制と教育」という脈絡のない短い文を三つ並べた投稿であった。但し，この中で「浅ましい野性的欲望を未発に抑制する心身の修練」に言及し，「飲酒喫煙の習慣を持つ人が翻然として何等一抹の未練も執着も残さず確実に永久に禁酒禁煙家となり…」と禁酒禁煙に触れているのだが，昭和17年３月号に「国民学校卒業生に告ぐ」という訓示風の一文をものし，国民学校卒業生に禁酒禁煙を呼びかけている。ところが１ヶ月措いた昭和17年５月号に「謹みて御聖範を仰ぐ」という文章を投稿した。これは「世界一流の家庭雑誌と銘打った某雑誌」に「聖上陛下に於かせられましては御酒も御煙草も御嗜み遊ばされぬ」と書かれていたことに対して「不敬である」と言い放つ。「嗜み遊ば

されぬ」というのは戦時体制下だというので「節酒的禁酒」をしているかのように読めるというのが理由である。昭和天皇が一滴の酒も飲まなかったかどうかは邪推するところではないが，柴田義雄はそう信じている。そして「国民学校卒業生に告ぐ」で示した的全く同じ禁酒論を披露している。この禁酒禁煙論はさらに７月号における「福岡県教育報国会の信条に就て」で

神ならひ，ならひまつらん煙草をも酒をも召さぬ明つ御神に

という歌も詠みつつ，当時の国策映画「父ありき」,「燃ゆる大空」における酒・煙草の描き方を非難しているのである。つまり，飲酒や喫煙の場面が多いということであり，模範的な父親や皇軍兵士が飲酒喫煙をしているのはおかしい，ということである。映画評では「例へ其れは事実であつても見るに忍びない」と現実を認めはするが,「陛下の赤子，年若き空の荒鷲が何故に酒は飲んでよいのかと憤慨に堪へない」との真情を吐露している。さらに「大日本青少年団の積極方針を評す」（昭和17年11月号）では10月25日付西日本新聞の記事に「大日本青少年団では……善き指導の下に酒煙草を許して現下生産部面に健闘する青少年の士気を鼓舞するといふ積極方針を取る事となつた」と記載されていたことに対する反対意見である。仔細は措くとして,「大東亜戦の完遂，大東亜の共栄，之は皆禁酒禁煙を必要とする，大洋は酔はず，大陸も酔はず，禁酒禁煙は日本古来の伝統である。酒と煙草と興亜とは両立しない」とまで断定して，禁酒禁煙を訴える人物であった。

そうした思想は衛生教育への関心に基づいているようで，昭和17年８月号に「福岡県養護教員に告ぐ」という文章を書き（「～に告ぐ」というのが好みのようである），国民学校における養護教員と健康教育の必要性を説いた上で，養護教員を叱咤激励（批難めいた話が多いが）している。「衛生と教師」（昭和17年12月号）も禁酒禁煙を織り込んだ説教めいた小文である。その後「養護訓導の執務要項に就て」（昭和17年８月号）で要項の解説を行った後は「学校衛生参観記」（昭和17年10月号），「無医村に於ける低学年保健の実践報告」（昭和18年１月号),「築城国民学校体錬科衛生視察会概況」（昭和18年11月号）といった報告文を掲載している。しかし,「無医村～」は自分が好調であった小富士国民学校の実践報告であり,「是を断行して柴田校長は同校在職十八年，此の村此の学校に必要なものは先づ予防医学への徹底であると……」と我田引水風の報告書となっている。

倉富崇人は昭和15，16年に連載を続けていた人物である。倉富崇人は肩書きを久留米市とのみ記していて所属先は書いていないが，論攷の中で「教職に身を置いてゐます」と言及しているので当時は小学校の教員であったと考えられる[(5)]。

倉富崇人は哲学的方法によって昭和15年２月号から「『まこと』に於ける日本的なる実践哲学」を掲載し始める。このシリーズは「『まこと』の日本に於ける実践哲学」,「『まこと』の日本的実践哲学」,「日本実践哲学としての『まこと』」,「『まこと』の日本実践哲学」とくるくるタイトルを微妙に変えながら昭和15年11月号まで（七）まで続けて連載した。その章立てのみを記せば左のようになる。

緒論
　一、哲学の意義
　二、哲学的方法
　三、「まこと」の概説
第一章　「ま」、「真」、「まことの総説」
第二章　真言
　第一節
　第二節　言の形式的意義
　第三節　真言（其の一）
　第四節　「のり」と「分」
　第五節　真言（其の二）
　第六節　真言と皇国の道
第三章　真事
　第一節　「言」と「事」
　第二節　人間の知性
　第三節　行の発見
　第四節　行の哲学
　第五節　真事
　第六節　吉田松陰と至誠
　第七節　二宮尊徳翁と誠
　第八節　軍人勅諭と一の誠心
　最後に
第四章　信
　第一節　知、行から宗教的世界にまで
　第二節　信、帰命、死
　第三節　人世に於ける難関と信
　第四節　信の本質
　第五節　信による観の展開
第五章　「一」（其の一）
　第一節　「一」の輪郭
　第二節　「一」と無の場所
　第三節　命の自覚に於ける「一」
　第四節　「一」と今
第六章　「一」の体、相，用
　第一節　「一」の体、相

第二節　「一」の用

倉富崇人はこのシリーズを書き終えると「武道教育原義」の執筆にかかった。その初出は昭和16年２月号であり，同年９月号まで５回に分けて掲載された。

第一章　武道本義研究の必要と其の方法
第二章　武道の輪郭（其の一、武道と武士道）（其の二、史的考察）
第三章　武道に於ける「道」
第四章　武の意義
第五章　大義（武の根本規範）
第六章　戈（武の基本的精神）
第七章　武芸と悟道
第八章　武士の日常
第九章　文と武（概観）
第十章　文の本質
第十一章　文と武（関係考察）
第十二章　文官武官
第十三章　武道教育の沿革
第十四章　武道精神の特質
第十五章　武道精神とサムラヒの心
第十六章　武道の教育的使命
第十七章　武道教育の方針

当初「前篇　武道教育原義」と題して連載を続けていたが，第５回目には「前篇」の文字はなく最後を（完）で締めくくっている。内容は右の目次のように精神主義的な武道論が蕩々と語られている。

次に倉富崇人が登場するのはやや間を置いて昭和17年６月号であり，テーマも「家庭教育の諸問題」というものであった。「序にかへて」という見出しが冒頭にあり，それがほぼ七頁という長文になっている。そして【続】で締められているのだが，その後掲載されることはなかった。内容もフレーベルの名が１箇所出てくるが，得意とする「哲学的」叙述は見られない。

倉富崇人は戦後『子どもを生かす学級指導』（1949年），『集団の理解』（1956年）などの著作を検索することが出来るが，同一人物であるかの確認は取れていない。

次に12回の掲載をしている末永菊槌について見てみる。末永菊槌も昭和15年，16年にほとんどの論攷を発表している。まず昭和15年４月号に「日本精神の再検討―主としてその包容性に就いて―」を発表している。その内容は左のような項目になっている。

日本精神運動の消長
日本精神説批判（一）――その古典主義に就いて――
日本精神説批判（二）――その神秘主義に就いて――
日本精神説批判（三）――その排他主義に就いて――
日本精神説批判（四）――その精神主義と独善主義に就いて――
日本精神の意義
日本精神の要素と発展性
純粋固有の精神
日本人の同化力
外来思想と自尊心
日本精神の明日

末永菊槌の問題意識は「日本精神運動が余りにも周章しく去来しやうとしてゐる原因の一半は，それが余りにも反動的であつたことにあることではなからうか。又同運動の目標たる日本精神そのものゝ内容が余りにも不統一であり多岐であり時代錯誤的であり空疎な題目を掲げ過ぎたからではなからうか」という点にある。そのために日本精神をそれに対する批判も含めて分析し，「現在の日本精神の如く神儒仏の三教…に明治以来の欧米の自由主義，個人主義の思想を加へ而も此の四者…を何品とも分らざるまでに融合すべきである」と自由主義，個人主義を受け入れるべきという立場に立ち，「近時批判し検討されて再認識された自由主義が日本的性格に立つ東亜協同体説や全体主義と共に止揚されたる日本精神を正常に堅実に建設しやうとしてゐることは喜ばしい傾向」と評価し，「日本精神か世界文化に於ける思想的先覚を自負すべき明日の光栄を期待したい」と結んでいる。

さらに６月号，７月号には「全体主義の性格とその日本化―皇民錬成の指標的原理の一として―」と題する論文を連載している。先の論文と同様「当代の全体主義は自由主義とマルクス主義とを止揚して登場し」たという認識に立ち，ドイツのナチズムには「余りに独善的神話的要素」が強く，対ユダヤ人策は「偏狭の非難を甘受せざるを得ない」とし，「理論的自殺をなしたと見るべき」とした上で「我が国の一部にも斯る思想の所有者を見出すことは自戒されねばならぬ」と鋭い批評をしている。そして「私達は過去に於て自由主義やマルキシズムの俘囚たらずよく之を利用したと同じく，あくまでも全体主義てふ舶来の公式の外に闊歩しよく之を日本化して日本精神を培ふ肥料とし，やがて日本精神を世界的に宣揚する日の為に文化的歩みを歩みたいものである」と言うに至っている。二つの論文を通じて末永菊槌は時流に対して一定の批判的なスタンスを持っていたようである。

しかし，昭和15年10月号において末永は「教育経営の基礎としての環境調査」という論攷を掲載した。これは「最近独逸に勃興した教育的環境学」に触発されたもののようであって，初回は総論的な環境学の理論について語り，12月号では調査の技法について説明をしている。そしてしばらく

時間をおいて昭和16年５月号より実際の調査結果について連載を始め，10月号まで６回に亘って報告している。データはいずれも昭和11年のものであったが，家庭環境等についての数値的データが紹介されている。そして再び半年ほどの間を置き，昭和17年４月号に最終稿が掲載された。

末永菊槌の場合はまずは思想的な論評を展開した後に社会学的な教育実態調査の成果を発表するというスタイルで問題提起をしていった。その両者にどういう関係性があるのかは分からない。また，昭和17年以降執筆が停まった理由も分からない。

Ⅱ　教科教育

教育会雑誌であるから教師にとって重要な課題である教科教育の実践に関する記事は多い。

◎　科学教育乃び理科教育

昭和15年５月号に三井郡の上野秀夫という人物が「科学教育の課題（一）」と題する論攷を寄せている。上野はこのシリーズを同年７月号，８月号，そして翌16年１月号に連載した。上野は「此の科学性とでも呼ばれる性格は，西洋に於ける希臘以来の理性の伝統を継いだものであり，西洋的性格の特性であると」と認めつつ，「自己の長所に陶酔して，短所を改むる努力を忘るゝならば，大国民的性格の欠如」と受け止め，「私は科学的精神こそ『皇国精神』の中核であると考へる」[(6)]と位置づけようとする。そしてドイツの例を引きつつ「科学の民族的性格」に言及し[(7)]，科学の基礎には統一的世界観がある[(8)]と言う。ここまで書いたところでしばらく間を置いて上野秀夫は昭和16年１月号に（四）を掲載しているが，この号の論攷は「理科教授と，教授上の貴族主義」と題され，「従来初等理科教授につきまとふ一つの陰影」として「『高尚な知識を！多量な知識を！』と言ふ教授上の貴族主義とも呼ばるべき百科全書的教授思想」を批判する。そして「教授が生活的に行はれることになるためには，すでに教育界に唱へられてゐる労作教育の思想，なかにも，…又，知的学習に児童の筋肉活動に訴へる方面を多く加味しやうと言ふ考」えによって「改善のメス」をいれ，「理科教育上の多元的貴族主義の教科書は理科教育の重点主義に変らねばならぬ」とし，「生活を重んずる経験主義的潤ひある理科教室に変らねばならぬ」[(9)]とこの論攷を締め括っている。最後に（未完）と記してあるが，以後彼が『福岡県教育』に寄稿することはない。

上野秀夫はすでに「東亜民族主義と教育」[(10)]というイデオロギー的色彩の濃い論文を寄稿していた。その上野が科学教育について書いたのは科学的思考が西洋的なものであり，それを立ち上がろうとする国民学校教育の中にいかに位置づけるかという問題意識からであろうと思う。

また，三潴郡城島小学校の山浦喜代記は昭和15年12月号に於いて「国民学校案理数科理科の実践について」という論文を寄稿している。山浦は「東亜新秩序の建設に最も必要なものとして「我が国人の体位向上と資源愛護である」とし，それゆえに「体育と理数科教育について再検討しかゝつたのは宜なるかな」という問題意識から書き起こし，理科教育の目的観の確立，具体案の作成と実施，そして施設経営をあげる。そして第一章に於いて「かくありたい理科教育」を論じ，第二章では「精神総動員と物資総動員」と題して，「忠義を自己の専売特許のやうに自負する空想的愛国主義

者」には「自然科学は国家の発展を阻害す」というような連中がおり，自分はそういった「井の蛙的我利々々学者の言説を排撃するものである」と言い，「理科教育の長期建設を図るべきだ」と提言している。そして第二節は「日本的理科教育の原理」にして次号に書くことを宣言しながら，この論文は途絶えた。

いずれにせよ，そうした国民学校実施に伴う理科教育改革への問題意識はかなり共有されていたと思われ，福岡工業学校長であった弘中廣志は昭和16年７月号に「科学する生活」という論攷を掲載する。この論攷で弘中は「科学は中庸を発見する手段であり，『科学する生活』とは『中庸の道を履み行ふ生活』である」とし，「大和魂の科学面を磨くことが，日本人の科学性乃ち科学心を振起することである」[11]と結んでいる。国民学校教育の立ち上げに際して橋田邦彦の影響があるのかもしれないが，「科学する心」を周知させようということであったのだろう。そして翌８月号より弘中は「『科学する生活』欄」という形で論攷を連載し，10月号まで続けた。内容は「科学する生活」にかかわる短文を纏めていったものである。例えば９月号では「順序」「価値」「左側通行」「道路」「練習」といった項目について科学的（かどうか怪しいが）なまなざしでコラム的な小文を書いている。

ところで前述の山浦喜代記が「国民学校理数科の実践について（二）」を１年有余の時日を措いて掲載したのは昭和17年３月号であった。前号の続きとして「第二章第二節　我々の求める理科教育の姿」からはじまっている。ここでは改めて国民学校教育の意義を論じ，日本の伝統に回帰して「直感―腕の理科教育を持つべき」であり，それは「今までの分析的，消費的理科教育に一歩すゝんで綜合的生産的理科教育に進んでゆかねばならぬ」としてこれを「日本的理科教育原理として取り上げたい」と言い，具体的な事例を提示している。次いで第三章では国民学校にかかわる法規の解説をして終えている。実際に国民学校が実施されてほぼ１年近くたったところでの続編と見ていいだろう。

ともかく国民学校制度が実施されて科学教育は福岡県教育会においては重要な関心事項となっていたものと思われる。そういう流れをうけてか，昭和16年11月号では，「科学教育に関するもの」という特集を組んでいる。掲載された論攷は花田主計（三潴中学）「科学教育の指導精神」，城島国民学校「理科教育について」，小川登一郎（遠賀郡頃末国民学校長）「科学教育の根本問題」，山門郡藤吉国民学校「理数科理科『朝の観察』の経営（一）」，杉本辰雄（三池郡開国民学校）「学校の庭に咲いてゐる花の観察実習の記」，天野倉二（宗像郡田島校）「勤労奉仕と科学教育」，小田近次郎（浮羽郡小塩国民学校）「是正さるべき科学教育の方向」である。

花田論文は「我々国民の科学的知能が，先進国以上に科学的水準を上げなければならないといふのである」という危機意識に立ち，「八紘一宇の肇国精神にかへつて世界なみに組した衣装をぬぎ捨てゝ，日本の衣装を世界人に着せて人間的色彩を保ちながら日本の世界，日本の科学世界といふ言葉にかへねばならなくなつた」と上野秀夫や弘中廣志に通じる科学史観を示し，「先づ基礎的錬成をなし教育の全きを期せねばならぬ」「結局あらゆるものを網羅する『百科字典主義』『詰込主義』の理科的態度又は精神に力点を置く従来の教授法を踏襲してはならぬ」と従来型の理科教育を否定し，「理科教育が科学的精神の発揚と科学知識の向上に力が注がれ，其の究極は理科教育の陶冶価値

を論じて人間感性へといふ，いはば理科教育を以て形式陶冶の一手段ともした」結論にいたり，「皇運を扶翼し奉る忠良なる日本人を錬成するといふ強い信念」を理科教師に求めているのである。

小川登一郎は科学教育に向かう教師の心構えと子どもたちに科学心を植え付けるよう精神主義的に訴え，小田近次郎も国民学校に於ける科学教育を意識して「科学教育は科学の知識を授けるだけでは不充分である」ので「正しく科学する態度即科学訓練をなさなければならぬ」と檄を飛ばしている。いずれも知識注入主義から「科学する心」の教育への転換と錬成，そして国家主義というしばしば論理の飛躍は見られるものの新たな科学教育の位置づけを指向している。

また，城島国民学校，藤吉国民学校，開国民学校＝杉本辰雄，田島国民学校などの論攷はそれぞれの学校での科学教育，理科教育の実践報告となっている。城島国民学校ではすでに昭和15年１月に『興亜日本，理科教育の正道』なる出版物を発行しているとのことであり，その成果に基づいた論を展開する。「愛の理科教育」を標榜し，「西洋的な殺伐な理科教育から日本的の美しい理科教育の芽生えを見る」と言う。そして「理科共栄圏の確立」として他教科の密なる関係を構築しようとしている。しかし，他の学校の報告はそこまでは至らず，理科教育と精神主義的な国家主義が並行しているものであると言えよう。

平川令城（早良郡，後福岡師範専攻科）は「私の理科教育の一端」という論攷を昭和16年４月号に発表している。「以下愚才をもかへり見ず理科教育を中心として私の教育随録を述べる」として書き始め，自身で考案した理科教具の紹介をしている。その一つは石油発動機の原理説明器なるものであり，もうひとつは直流電動機の指導の教具であった。２回目は５月号に（二）として掲載され，理科的環境こそ理科学習の道案内的の役目を持つ存在であつて，理科に対する向学心を培つて行くことや，理科的に物を考へる頭をつくる事や理科学習の方法を研究させる事等に最も都合のよい環境にあらしめるのである」登言うことで，理科的環境の必要を述べ，６月号ではその環境経営について自身の実績を説明し，それを「田舎に於ける小博物館の経営であり理科主任はその館長として収まらんとするのである」と説いている。そして「微弱乍らも見出す施設の反影之こそ経営するものによつてのみ感じる喜びであらう」と８月号でまとめている。８月号では「帝国は東亜の守護神として…」という文章で締め括っているが，取ってつけたものでしかない。平川はこの稿を終えるともう執筆することはなかった。

店田（目次には廣田）隆資（門司市小森江東校）「昆虫採集の進むべき路」（昭和17年８月号）は「児童の科学的興味」に着目して昆虫採集の教材研究をなしたものであり，同じ号に掲載されている松隈敏明（三井郡善導寺校）「低学年理科（自然の観察）」は「幸にして本年４月より教鞭を執る身となり」とあるところからおそらく新任教員の手によるもので生硬な理科の目的論，指導論，教材論を自身の実践報告を交えながら語っている。

鞍手郡西川国民学校の吉田脩一は昭和18年１月号に「郷土に立脚せる自然の観察。理科の栽培，飼育，観察暦」という論攷を発表し，休刊近い昭和19年５月号まで五回にわたって連載したが，これは東京中心の編集になっている教科書の教材を郷土＝福岡の季節感に合わせて作り直す作業であり，郷土という子どもたちの足が地に着いた理科教育を志す教育観に基づく教材編制レポートであ

る。

国民学校と科学振興という風潮の中で「科学する心」を念頭に置いた科学教育論の喧伝と，ともかくも理科教育の実践の試みがしばしば紹介された。そして理科教育の論攷は教科教育の中でも最も多いと言うことができよう。

◎　算数科教育

国民学校令において新に開設されたのが理数科算数であったが，算数科については福岡女子師範学校附属小学校訓導の阿部哲郎が一人論陣を張っていた。まず昭和15年７月号に「理数科算数に於ける算数の字義について」を発表している。ここでは「算術を算数と改めた…単に算術のみならず図形的教材及代数的教材を教えるのだから名実相合せしむるため算数とする」という文部省普通学務局長の説明を引用し，石山脩平，山本孫一，堀七蔵らの見解を並べ，さらには貝原益軒の「算数は賤しき業なりとて大家の子に教へず，是国俗のあやまり世の人の心得違へるなり」というくだりや藤田貞資の「今の算数にして用の用あり」という一節も引用して新しい教科である算数の字義について考察している。翌８月号には「尋六（上巻）小学算術書に現はれた理数科算数の精神」を書いている。阿部は『学習指導』６月号に女子学習院の柿崎教授が「算数ならばある，尋常六年上巻の教師用書を見れば到るところに国民学校の教則を具体的に説明した言葉が明らかに出て居る」とあったのを見て，さっそく同教科書及び教材要項，指導要領から関係する部分を抜き出して解説している。そして「事象を数理的に考察した場合に事象を数理を通して必然に其の事象の意味を解決する所迄が真に国民学校理数科算数の精神の具体化となるのである」という結論を見出している。「小学算術書に現はれたる作問教材」（昭和15年11月号），「小学算術書に表はれたる三法則の発展」（昭和15年12月号），「カズノホンに於ける空間教材の一姿態」（昭和16年９月号），「初三珠算指導の一考察」（昭和17年１月号），「国民学校理数科算数に於ける極限の思想」（昭和17年11月号）と論攷を発表しているが，いずれも教科書や教材の解説である。

阿部哲郎以外では直方市の瓜生太郎なる人物が昭和15年２月号の段階で「皇国算道と児童の生活態度」という論攷を発表している。彼は「我が国の算術教育は術としての算術」教育であってはいけない，「算術を通して，皇運を扶翼し奉る皇民を錬成する皇国算道でなければならない」という「昭和十年来の私の算術教育行において終始変らぬ信念」だとして書き起こしている。国民学校理数科算数の理念を先取りしようという論攷であった。しかし，その後瓜生は論攷を発表していないし，阿部哲郎以外に算数教育について論じる人はいなかった。

◎　国語科教育

国語科に関しては古野世界（鞍手郡宮田南小学校）という人物がいくつか論攷を書いている。古野が書いているのは国語教科書の中身の紹介とコメントである。まず「『ヨミカタ』一の読後感」を３回に分けて昭和16年５月号，７月号，10月号に連載した。また，昭和17年５月号と７月号に「初等科国語の読書管見」を連載している。これは（未完）としているが，以後古野の寄稿はない。古

野の場合，いずれも教科書の細部にわたってコメントを付していくという書き方であった。「『ヨミカタ』一の読後感（三）」の一部を紹介すると左のような調子である。

> 五十四頁。アリの行列，セツセトトホルで本文を一貫する精神を表はしいゐる，精励に暇なきアリが通りすぎる毎日にヤ，コンニチハとお辞儀をして行く，蟻といへば汗水流して働いてゐるものときめてかゝることはいるまい。楽しい夏の日盛りを，花の中の小径を大勢で通つてゆく彼等の社会にとつては実に唯一の行楽かも知そ[ママ]ない
> 五六―五九頁。ずつと文章が複雑になってきた。……

国語教育に関して言えば，昭和17年８月号で高瀬勇（小倉市到津国民学校）が「漢字教授の振興策」を書いているものがある程度で他に論攷はない。なお，すでに紹介した弘中廣志が「『科学する生活』欄」（昭和16年10月号）の中で「国語の科学面を磨き出せ」と言っているものがあるが，当然，主題は科学教育であって国語教育ではない。

◎　体錬科教育

体錬科については昭和16年10月号に「体錬に関するもの」という特集が組まれ，六本の論攷が載っている。豊村文蔵（若松市浜町校）「皇堂帰一の体育」，安部敬一（宗像郡吉武国民学校）「日本体育への思慕」，吉竹栄（嘉穂郡）「体錬科実践方途」，山門郡瀬高第三校体育研究部「本校体育諸行事の一般」，小倉市中島国民学校体錬部「益軒貝原先生研究序説」，岩熊丘（鞍手郡西川国民学校）「体育指導上二三の強調」の六本である。

豊村文蔵は「祖先の遺風を顕現し先人の遺徳を具現する」皇道帰一の体育を勤務校では提唱してきており，昭和15年11月に厚生省体育官森秀氏を招聘して第１回の皇道帰一の体育研究会を開催したこと，昭和16年３月には記念体育会をしたこと，10月中旬には再び森秀氏を招いて第２回の研究発表会をするのだという程度のことが大仰な文章で紹介している。安部敬一は。日本の民族的体育をめざし，巡礼，武道を以てそれと位置づけ，「日本体育と称すべきものは総て精神の鍛錬を主とし人格錬成への歩みであり，単なる体力の競争を目標としたものではなかつた」として「体錬科こそ最も慎重に考へられ荘重に行はれなけりやならぬと思ふ」と締め括っている。吉竹栄は「本校（学校名不明－新谷注）は全体主義（天業翼賛主義・臣道実現主義）の理念に則り，徹底的に洋風体育観の羈絆を脱し，解剖学的，生理的，自然科学的，一生活機能目標としての体育を排し，人間学的，相関的，生命体有機体としての体育をねらつてゐる」と科学教育以上に反西洋，脱西洋色を打ち出した方針を示している。瀬高第三校体育研究部は儀式行事に体育行事を最大限に位置づけ，その役割を示した。列挙している一覧表を見れば，４月の春季遠足にはじまり，虫歯予防日，奉仕作業，大運動会，武道試合などの年中行事があり，月行事，週行事，日行事がぎっしりと並べられている。中島国民学校体錬部は貝原益軒研究ということで体錬とは関係なさそうであるが，益軒が楠公の建碑を計画したことを以て「天壌無窮の皇運を扶翼し奉り，肇国の理想を顕現する国民錬成の新制国

民学校の根本理念である」と乱暴に言い切り，益軒をして「日本精神の体現者であり，「現在欧米文化に対処する者への偉大なる教訓で蟻活模範である」とした上で『養生訓』を引き合いに出し，「国民学校体錬科が従来の小学校体操科を質量共に拡充して，健康教育の徹底を促進するの時，先生の著書は直ちにとつてもつと裨益するところが少くない」と益軒を体錬科教育に位置づけている。岩熊丘は「国民体位の向上」に焦点を当て，鍛錬の考えと指導の要点，そして体育習慣の持続について語っている。

この特集で語られる体錬科教育は非常に観念的な反西洋主義，日本精神主義の標榜に満ちており，具体的な体錬科の内容には至っていない。

しかし，体錬科の中において重要であると思われる武道についてはいくつかの論攷があった。すでに説明した倉富崇人「武道教育原義」はその代表的論攷であるが，それに先だって昭和15年９月号及び10月号に小倉師範附属の大鶴正弘が「体錬科武道の過渡期に於ける考察」及び「体錬科武道の教則について」を掲載している。前者は国民学校体錬科に武道が加えられたことを受け止め，それが「剣道と柔道とをやるのだ」というのではなく，「武術は本来一体不可分のものである」という観点に立った武道教育観を示している。後者は武道教育を歴史的に見直してその意義を確認した上で，武道教育の目的，教材，教授方針を論じている。

中野光雄（久留米国分尋常高等小学校）は「武道教育の実際」を昭和16年１月号より７月号まで隔月で連載している。前述の倉富崇人「武道教育原義」は同年２月号から連載が始まり，４月，６月，８月，９月号と中野論文と交互に掲載されていた。中野の勤務校である国分尋常高等小学校では昭和14年に県の研究指定を受け，前月にその研究を終了したところだという。倉富論文と比較する上でその目次を示しておこう。

（一）（二）
　一、序言
　二、武道教授の基調
　三、当局の要望
　四、真の武道と礼儀作法
　五、闘争本能の陶冶
　六、綜合並進的修練
（三）
　一、教師の研究
　二、教授の要訣
（四）
　一、柔道教育の回顧

中野は（一）（二）では「原論要望の二点について述べた」が国民学校が４月から開幕したことも

意識して，（三）では「教授の実際について論述する」として稿を改め，具体的な指導方法を詳述している。また，６月３日に同校は筑紫郡の男子職員100人の視察をうけ，その際「柔道方面の成績は非常に不振である。如何なる方法で指導すべきか」という批判をもらったようだ。そこで，（四）では柔道に絞った議論を行い，実際の具体的な指導法も叙述している。しかし，この稿は（未完）としているものの中野は武道教育については以後論攷を著してはいない。

尤も，中野は武道教育について書く以前には「日本学と国民道徳」なる論攷を２回にわたって掲載し（昭和15年２月号及び５月号），以後は「養護学級経営抄論」をやはり２回連載している（昭和17年12月号及び18年２月号）。但し，この時の勤務校は筑紫国民学校となっているので，同一人物かどうかの確認はできていないし，同一人物だったとして武道教育について中断した理由もわからない。

昭和16年11月号には福岡市東住吉国民学校が県指定研究発表会での成果として具体的な指導方法を「本校の武道教育」と題して報告しており，昭和18年３月号で馬場豊二（八女郡横田国民学校長）が「体育保健皇民錬成自修剣道」という論攷を寄稿しているが，内容は具体的な剣道の指導方法となっている。馬場は昭和16年10月号に「武士道断片録」なる文章を載せた人物で，昭和18年９月号には「学徒剣道試合規定解説」を書いている。校長であると共に「剣道文検免許錬士」という肩書きも持っており，剣道の専門家であったようだ。

Ⅲ　思想史・郷土史

『福岡県教育』で見落とせないのは歴史的な記事である。この時期は強く国家，民族に対するアイデンティティが求められたせいかとも思われる。思想史的な内容の記事の中でも貝原益軒は非常によく記事として取り上げられるし，また引用もされている。当然のことながら益軒が福岡の思想家であるということが福岡県教育会の会員には興味を惹いたものであろう。福岡女子師範学校教諭である井原孝一は「貝原益軒の其の人格」（昭和15年１月号），「貝原益軒と其の教育思想」（同２月号），「貝原益軒の楠公論と湊川建碑の企図」（同３月号），「貝原益軒研究者としての三宅米吉先生」（同８月号），「益軒先生の内助者としての東軒夫人」（同９月号）と昭和15年中に益軒にまつわるエッセイを立て続けに掲載している。９月号の「東軒夫人」はしばらく経って昭和18年11月号に胡枝子の筆名で（二）が載せられた。井原は胡枝子の筆名で別に郷土史的・思想史的なエッセイを書いている。

橋田義雄（福岡市奈良屋小学校）は昭和15年12月号に「教材に現れた貝原益軒先生」を書いている。橋田は同年10月号に「吉田松陰先生の教育愛」を書いており，思想史的な関心を持った人物だったのだろう。著名な郷土史研究家伊東尾四郎も「福岡藩儒竹田家の人々」（昭和16年９月号）の中で益軒について触れている。米田寒山（久留米市金丸小学校）は「時局と先哲　特に伊藤仁斎翁と児童の教養」という論攷を連載しているが（昭和15年１月号，２月号，５月号），伊藤仁斎の来歴を語ることに終始し，必ずしも時局に言及するものにはなっていない。

但し，思想史的な内容の論攷は昭和15，16年に集中しており，戦局が深刻になってくるとほとん

ど姿を消す。

次に歴史殊に郷土史にかかわる論攷について見てみよう。前述の伊東尾四郎は著名な郷土史研究家であり，時折，短い文章を寄稿している。「福岡県教育史資料叢談」を昭和15年１月号に書いているが，福岡県教育会は福岡県教育史を「皇紀二千六百年」を期して編纂するようにという声が上がったが，それが見合わせになったという事情を述べたあと，２月号，３月号で教育史資料の紹介をしている。しかし，この試みはそこで途絶え，昭和18年４月号に「郷土地誌の出版」，昭和19年１月号に「『我家の系譜』作製を提唱す」といったいずれも１頁ないし２頁程度の短い話題提供をしている。

やはり久留米の著名な郷土史研究家である黒岩玄堂（万次郎）は「昭和十四年の秋の末つかた野中町なる久留米陸軍墓地の塚造りの業に仕へ奉りて」（昭和15年１月号）では古の和歌を紹介し，「筑後川雑俎」（昭和17年７月号），「筑後川雑俎（二）」（同８月号），「高山正之先生の絶命辞に就いて」（同９月号）等のエッセイにおいても古の和歌を紹介する形で郷土史のエピソードを語っている。「筑後に於ける尊皇思想の伝統」（昭和18年２月号）で思想史的な検討を行っているが，昭和19年３月号に記した「米英等の黠虜，日本国土分割侵奪非望の密約」は幕末の外交史料の紹介であった。

思想史にしろ，郷土史にしろ『福岡県教育』に歴史的な文章が散見されることは押さえておきたい。

Ⅳ　報告書

『福岡県教育』に多くの会員が参加しているとすれば，各種の報告文である。報告文には自身が参加した体験記と目撃してきた視察記がある。視察記にはまず，外地視察がある。昭和15年１月号に「中支に皇軍を慰問して―復命書―」が掲載されている。教育慰問団の復命書を掲載したもので，慰問団は野上丈雄（団長　福岡県教育会理事），三宅万蔵（八女郡），大村善雄（嘉穂郡），加藤寛（京都郡），重松七霊（三潴郡）の５名であり，三宅以下の四名は小学校長である。昭和14年10月27日から11月30日までの１ヶ月余にわたる旅行日誌である。昭和15年６月号には江藤隆助（小倉師範学校）による「中支那方面事変地見学報告」が掲載されている。これは海軍省主催の海軍短期現役兵終了者教職員中各府県より１名宛選抜された見学団で，「児童ニ対スル事変地実況教示資料ノ蒐集波ニ海軍々事再教育ノ目的」で実施された。日程は３月22日より４月12日であった。所感として「一，恐縮せり，海軍の御厚意」「二，燦たり，帝国海軍の威力」「三，唯感謝，在支作戦部隊」「四，学ぶべき支那人」「五，現地を視察して教育を憶ふ」という項目でまとめている。「四」では「旺盛なる生活力」「合理的な生活」「商才に長けてゐる」「水に馴れてゐる」を「「吾々が指導的立場に立ち聖戦の目的に思ひ到る時，そこに憐むべき支那人の姿を発見する。親しめないと見え，汚らしいと観ずる支那人にむしろ学ぶべき多くの美点長所を発見」したこととしてあげている。そして「真の日本的自覚に徹しなければならぬ」「精神訓練を徹底させねばならない」「大国民としての教養を高め

ねばならぬ」という三点を自覚して帰国したのだと言う。

昭和17年９月号に恵良弘司（糟屋郡宇美国民学校）「満洲開拓青年義勇隊開拓団慰問団視察報告」が載っている。これは満洲国建国十周年を期して「慶祝に沸く満洲国へ満洲開拓青年義勇隊並に開拓団慰問激励をし，兼て一般視察を行ふ旅行団を，県の教育界で企画され」たものであった。旅行団は鞍手郡宮田中央国民学校長有吉生男を団長とし，県下の国民学校長，教頭，訓導の総計11名からなる旅行団である。訓導は２名であり，その１人である恵良が記録係となったのであろう。８月22日に下関に集合し，釜山，京城を経て満洲入りした。視察を終えて門司港に帰り着いたのは９月10日であった。恵良はまず，満洲開拓青年義勇隊の実態報告を行う。そして開拓生活の厳しさ，例えば食事が「相済ないことだが，やつとのどを通した粗食であつた」というふうに受け止め，「内地そのまゝの心境では，到底堪へ得ない苦労」だと解し，「日本の国策に従ひ，北満の地に，軍隊の直後に控へ，……満洲の沃野を，先輩の血のにじんだ地を，一鍬一鍬打ちおこし，根強く日本人の生活をその中に張り拡げ，満人を指導するとと共に……安居楽業の理想生活を，己の代でなく，孫曾孫に於て完成しやうとする遠大な理想のもとに於て，渡満せよとすゝめ，又さうすべきであると思ふ」という教師としての決意を新たにしている。次いで，挑戦，満洲の教育事情について見聞きしてきたことを記述し，自然観察の結果も書き残している。さらに満洲の風俗にも観察記録の筆を進めて報告書を終えている。

昭和18年11月号と12月号に「満洲開拓義勇隊及開拓村慰問連絡出張報告」が２回に分けて連載されている。前年と同じく福岡県教育会主催のもので，旅程は８月23日より９月13日で，今回は博多から釜山に渡り，博多港に帰ってきている。団長は三浦直次郎浮羽郡教育会長，団員は青年学校長，中学校教諭，大牟田市視学，国民学校長の総勢５名と前年より半減している。尤もこの他に２名ばかり参加予定者がいたが事情によって参加していない。記録係は嘉穂中学校教諭の田生久であった。田生は時折，次作の短歌などを交えた日録としていた。

ゆゑわかぬ言葉の群に混り居て汽車待つ襟に寒き夕風
銃とりてこもりし家の軒古りて松江の風にそよぐ秋草

教育視察という点では溝田繁雄（福岡市西新国民学校）「日本一の音楽国民学校参観記」（昭和17年11月号）がある程度であり，教育情報としては少ないと言えよう。むしろそうした情報は各学校に持ち帰るもので，『福岡県教育』に寄稿する性質のものではなかったのだろうか。

一方，体験記的なものとしてはまず倉光晴爾（八幡市平原）の「勤労報国隊に参加して」がある。昭和15年８月号にだ１回目が掲載され，11月号から翌16年１月号まで都合四回にわたって連載された。６月17日に倉光ら「福岡中隊幹部十名」は門司駅を立ち，満蒙開拓義勇軍内原訓練所に入所して２週間ばかりの訓練を受けた。そして７月２日に東京での壮行式を経て新潟から羅津へ渡り，牡丹江より栗熊村の北甸子という「満人部落」に入った。そこには58名の先遣隊の人々が入植しており，ここで勤労奉仕を行ったのである。「仕事の内主要なるものは高粱大豆の中耕除草，麦苅，水田

作業，道路工事，畜産，加工等であつたが，後半は殆んど建築に関係した仕事許りであつた」という。それは先遣隊の家族を10月には呼び寄せるので，そのための住宅建設であったということである。倉光は「青少年の教育に当たられる方々が，今少しく義勇軍に関心を抱かれ，又満洲に注目して戴きたい事であります」と結んでいる。

この内原訓練所であるが，昭和13年１月に青少年義勇軍訓練所を内原村に創設したものである。この時幹部中隊も設置しており，３月にそのための幹部訓練所を併置した。そして昭和14年２月１日に鯉淵村に施設を新設し，あらためて満蒙開拓幹部訓練所と称した。倉光が満洲に勤労奉仕に行く前に訓練を受けたのは内原訓練所であるが，鯉淵村の幹部訓練所に福岡県教育会は入所者を送っている。『福岡県教育』昭和17年１月号と２月号に「茨城県東茨城郡満蒙開拓幹部訓練所入所々感」が掲載されており，入所者の体験記が載せられている。県下29名の国民学校，青年学校の教員が参加たが，そのうち20名の文章が載っている。日程は昭和16年12月６日より12日までの７日間であった。おおむね午前中に学科，午後に作業，夜には何らかの催し物があった。

ちょうど入所して２日目に真珠湾攻撃があった。「八日古事記の受講中に彼の布告を聴いたのだから感激も一段新に，帝国の弥栄を三唱した」（中畑西行・企救郡曽根国民学校）というように，それぞれに感慨をもって訓練に臨んだようだ。

同じく昭和17年８月20日より26日まで24名が県教育会からの委託講習として幹部訓練所で訓練を受けている。この報告も９月号と10月号に16人分が掲載されている。それぞれは決して永くはない感想文なのであるが，深堀鷹俊（嘉穂郡伊岐須国民学校）なる人物は「訓練所生活一週間報道記」と題してこの２号のみならず，12月号にも体験記を掲載した。いずれも１週間の訓練であるが，その感じたところを『福岡県教育』誌上で共有化することは多くの読者にとってけっこうインパクトのあることであったと思われる。なにしろ肩の凝らない感想文であるのでついつい読み進めたのではないかと思われるからである。

訓練の目的はやや異なるが昭和16年３月号に原田喜之助（門司商業学校）「修養団皇民行指導員錬成講習会に参加して」という報告書が載っている。

また，講習会や研究会へ参加した報告や所感めいたものも掲載されている。竹中八州男（浮羽郡千年校）は「国民学校案講習会に出席しての所感（於福岡師範学校）」という一文を昭和15年11月号に寄稿した。すでに昨年の報告で紹介したように国民学校実施に先だっての講習会で会った。此の講習会の期間中にやはり受講していた某小学校長が交通事故で亡くなるというハプニングからこの報告書は書き始められている。竹中は「立案者，そしてやがてそれは命令者たる文部省の主催による講習を終了したことによつて，昨今うるさいまで教育雑誌・新聞などであふり上げられてゐる国民学校案に就いて，一通り其の全貌の認識が出来て大体の見当のついたことは大変よいことであつた」と評価し，「直接本家本元の文部省の講習を済ましてゐるぞ」といった「一種の優越感・ゆとりが出来た気がする」と満足した様子であった。「国民学校成金？」と竹中は教育関係出版社を揶揄してもいる。そして「此の時に当つて『私意私見を述ぶべからず』と断固として其の立場を明きらかにし，拠るべき所を鮮明に確実に協力に表明したことは暗夜に校名の還我してならないのである」

と「所感」を締め括っていた。しかし，翌12月号において，竹中は（二）を著している。すなわち，「然るに，之ほど明瞭に之ほど嚙んで含くめるやうに詳細に懇切に解説してあるにも拘はらず，未だ其の背後に何か文部省，国家が蔵して示さないものがありさうに思はれるのか，或はなほ国家の真意は此の説明の外に隠されてゐるとでも思ふのか，様々の質問質疑をするものが非常に多いやうである」と「私意私見」を気にする教育関係者の多いことに愚痴を述べる。そして「此の説明文を熟読玩味」し，「此の説明文だけに頼つて忠実によく〳〵研究し実行して行けば，決して国家の意志に反するやうな」ことはないと「私見」を述べる。そして４ヶ月後になるが昭和16年４月号に再び「国民学校講習会に出席して（承前）」なる文章を載せる。これは国民学校令についての深い読み込みであり，国民学校の説明となる。そして同じく「国民学校講習会に出席して」「国民学校講習会に出席して（四）」「国民学校講習会に参加して（五）」と６月号まで竹中の国民学校論は続くのである。

他に報告書的論攷として片岡チヨ（久留米市日吉国民学校）「研究会出席復命書」（昭和16年８月号）は全国女教員興亜教育研究会の報告であり，楢原梅香「随感『有夫女教員懇談会に列して』」（昭和16年10月号）も参加報告の文章である。

Ⅴ　雑稿（所感）

短い文章で所感的なものを述べた論攷はけっこう多い。著名人としては火野葦平が「随筆　兵隊と活字」（昭和15年１月号）は火野が「小倉中学校長波多野先生がぜひ何か掛けといはれるまゝに兵隊と新聞のことなど書いてみました。私も小中出身であるし，校長先生にはかなひません」と後記を書いている。尤も，同じ号において胡枝子（井原孝一）は「小倉中学と戦争文学の花形火野葦平君」で，井原が波多野校長（福岡県教育会理事）を唆して火野に原稿を頼んだいきさつが書いてある。

石松碎浪（鞍手郡）は「戦線随想」を昭和16年３月号に，「戦時随想」を同６月号に寄稿している。タイトルは異なるが連続した作品で「昭和十六年一月十日誌」と後者の文末にあるので，編集部によって２回に分けられたものだろう。「中支南支の山河と中国人への愛着を感ずる事切なるまゝに戦場の体験の一部を誌して戦線報道に代へたいものである」（「戦線随想」）という性格の文章である。

教師生活を通じて自身の教育に対する思いを綴ったものとして，女性教員の手による小野光子（久留米市国分校）「転任後の所感“別れ行く心”」（昭和16年８月号），「好きな先生の面影」（昭和18年５月号），楢原梅香（三井郡合川校）「卒業し行く児童等の感懐と私」（昭和17年３月号），教員生活４年目に思う感想を綴った建部正吾「新卒閑言（一）」（昭和17年10月号），宮本宗雄の「近頃思ふことゞも」（昭和15年10月号），「教育するこゝろ（第一編）」（昭和17年３月号），「教壇（教育するこゝろの第二編として）」（昭和17年５月号），「教壇（教育する心）」（同６月号），「跣足」（昭和18年10月号）といった一連のエッセイなどがある。哲士道人「初めて教壇に立つ教生の喜びと悩み」（昭和19年３月），「若き女教師へ望む・教生日記抄（一）」（同５月号）は『福岡県教育』末期に立て続

けに載せられたメッセージ的エッセイである。

また，退職教員と思われる人物による興味深い文章がある。筒井省吾（京都郡教育会顧問）は「二千六百年記念楠氏研究結論」（昭和15年１月号）で国定教科書に「楠木正成」とあるのはまちがいで「楠」の一字が正しいと主張し，「各学校諸先生と父兄諸士に告ぐ」（昭和16年12月号）は橋田文相に宛てた文章となっていて前稿で論じた「楠」に国定教科書と国体の本義を書き換えよというものである。

梓弓引き返したり楠のその一もじの正しき氏に

筒井の楠公に対する思い入れは強く，「別格官幣社湊川神社献詠歌集（乾）」，「別格官幣社湊川神社献詠歌集（坤）」，「別格官幣社湊川神社献詠和歌集附録大楠公遺訓を仮名書となして」を昭和17年10月号から12月号に書けて連載し，昭和18年３月号では「楠」問題での文部省図書局とのやりとりを「文部省質疑応答」として公開し，末尾に「文部大臣橋田邦彦閣下」宛ての「こも亦内山秘書官に請ふて大臣の高見を求むれども何等垂示なし故に世に公にして諸士の春蘭秋菊の教を請ふのみである　敬白」という文で締め括り，さらに昭和19年６月号で８頁になる長文の「大楠公六百五十年に際し所懐を述ぶ（楠公姓氏論考）」を著し，文末を「文部省質疑応答始末」と題して文部省を「不敬の極みなり」と断じている。この６月号は全28頁，編集後記に「頁数益々制限せられ，雑纂載する能はず，止むなく，次号に譲る，読者幸に諒せられよ」と誌した号であった。

おわりに

以上1940年代前半の，というより昭和15年１月号から休刊となった昭和19年７月号までの『福岡県教育』に掲載された自前の論攷についてとりあえず目を通してみた。雑誌に寄稿された雑多な種類の文章を機械的に分析するということはおそらくあまり意味のあることではない。むしろこの時期の一読者として『福岡県教育』をどのように読んだのか。換言すれば『福岡県教育』はどのように読まれ，どのように会員によって書き込まれたのかを概観したに過ぎない。また，学級経営・学校経営に関する論攷も一括りのカテゴリーとして存在したが，力尽きた。後に付け加えたい。また，もっと取り上げるべきカテゴリーもあるだろうし，見返していくたびに読み落とした文章もある。さらに読み込みなおしていく必要はあるだろう。

通観して考えられるのは以下の点である（順不同）。

◎　常連的な執筆者がおり，執筆が集中する時期に微妙にずれがある。

◎　この時期に論陣を張っていた人物で戦後も教育界で発言していた人物がいる。

◎　教科教育に関しては科学教育と武道教育に論攷は集中している。

◎　修身科についての論攷は少なく，総論としての日本精神論などがそれを補っていると考えてもいい。

◎　思想史・郷土史は決して重厚な論文が多いわけではないが,『福岡県教育』では存在感を持っている。殊に貝原益軒についての論攷が多い。

◎　視察記より体験記が興味深い。殊に内原訓練所の体験記は高鳴りの影響力を与えたものと見てもいい。また，体験記を書かせたこと自体が訓練乃至錬成の一環であったのではないだろうか。

◎　会員の日常的な教育，思想，文化的関心が多くの雑稿として寄稿されている。

◎　圧倒的に執筆者は男であり，稀に見る女性執筆者の文章力は弱い。と言うより，弱い印象を与える文体となっている。歴史的ジェンダーなのだろう。

註

（1）　拙稿「1940年代前半『福岡県教育』掲載記事の分析 ── 国民学校令の実施をめぐって ──」（『教育基礎学研究』第９号，2011. 3）

（2）　同右。なお，著書の刊行年は『日本の古本屋』サイト等の古書情報等により知り得たものを補充した。

（3）　井上正記『私達の天皇』の著者紹介欄より。

（4）　1970年に芥屋小学校と合併して引津小学校となる。

（5）　大正５（1916）年熊本県生まれ。福岡師範学校卒業。小学校訓導。後福岡師範学校専攻科を修了。福岡第一師範学校訓導，奈良女子高等師範学校訓導，奈良女子大学附属小学校教諭，同副校長。教育総合研究所（大阪）参与。（以上『小学社会科学習事典』文英堂　1980，2002年三訂版参照）

（6）　上野秀夫「科学教育の課題（一）」（『福岡県教育』昭和15年５月号　70～73頁）

（7）　上野秀夫「科学教育の課題（二）」（『福岡県教育』昭和15年７月号　45～48頁）

（8）　上野秀夫「科学教育の課題（一）ママ」（『福岡県教育』昭和15年８月号　67～72頁）

（9）　上野秀夫「科学教育の課題（四）」（『福岡県教育』昭和16年１月号　71～76頁）

(10)　『福岡県教育』昭和15年２月号

(11)　弘中廣志「科学する生活」（『福岡県教育』昭和16年７月号）

On the activities of FUKUOKAKEN KYOIKU-KAI "FUKUOKAKEN KYOIKU" in early 40's
— Investigating the theses written by the members —

Yasuaki SHINYA

In this investigation, we would like to analyze the theses written by the members of "FUKUOKAKEN KYOIKU", a newsletter of FUKUOKAKEN KYOIKU-KAI, that was published in early 40's, during World War II. These theses have diverse contents, from serious studies to private essays. First we consider these theses from the writer's point of view. Then we focus on the theses by subject, such as the curriculum, history of ideas, local history, reports and remarks.

It is worthy of notice that there were writers who contributed the theses frequently. We introduce the theses of 5 of most frequent writers. Some of them had influence in Japanese education even after the war. We analyzed the theses about Science, Math, Japanese, and P.E., for these are the most major subjects that were contributed. Science education was favored as the subject, due to the trend of advancement of science. Many of theses about Math explained textbooks and teaching materials, for it was a newly established subject. There were few theses about moral education. Instead, Japanese unique spiritual ideology was discussed as an issue.

History of ideas and Local history were important article groups in "FUKUOKAKEN KYOIKU". This is probably because they wanted to identify the nation and the people back then. Kaibara Ekken was picked as a theme quite often. Also we found many theses written by local history students.

Moreover, there were many articles about members' experiences of the various events and the results of their inspections. They used these as reports. The inspections that had been held in overseas territories attracted the interest of the members. Many experience reports about Uchihara Training School were contributed. We consider that it was a part of the training to write the reports about their experience there.

We found many articles contributed by the members, which made remarks on education, thoughts and cultural interests. An overwhelming majority of the writers were men. And those women found on rare occasion did not have great writing ability.